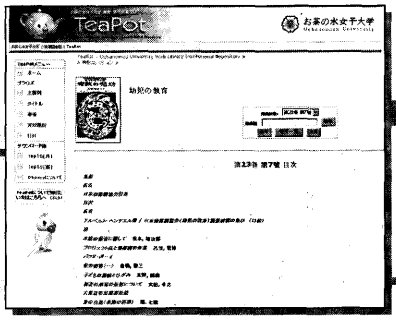
▶『幼児の教育』ネット公開に寄せて（4）

倉橋惣三の時代の「生活」を垣間見る

浜口順子



お茶の水女子大学附属図書館のWEBサイト内の「お茶の水女子大学教育・研究成果コレクション（略称TeaPot）」にてバックナンバーインターネット公開中。
URL：http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/

昨年の二〇〇八（平成二十）年六月から本誌バックナンバーのインターネット公開が始まり、本原稿執筆時現在では、一九〇一（明治三四）年の創刊号から、一九五三（昭和二八）年までの約半世紀分が、ネット上で閲覧可能になっています。この四月号が発行されるころには、それ以降のものも一部アップ可能となるよう目下準備中です。アクセス・閲覧の件数は昨秋以降急増しており、日本だけでなく、アメリカ合衆国をはじめ外国からの関心も高いことが確認されています。著者名で最も多く検索されるのは「倉橋惣三」ですが、倉橋は「倉橋生」と「SK生」などの別名でも投稿しているので、実数はさらに伸びます。

今回は、その倉橋惣三が生きた時代の「生活」という言葉に接近してみたいと思います。この四月から実施される改訂幼稚園教育要領は、平成元年の幼稚園教育要領の延長上にあるものですが、子どもの生活を基盤とした環境による保育を強調する趣旨は、倉橋が提

唱した「生活を生活で生活へ」という有名なフレーズともつながるものです。しかし、倉橋が活躍した大正期から二十世紀半ばのころの「生活」という言葉が、現代の「生活」とどの程度重なりのあるものなのか考える必要があるはずです。「生活」という語でキーワード検索して見いだした二つの記事を手がかりに、当時の「生活」という言葉の周辺を垣間見てみましょう。

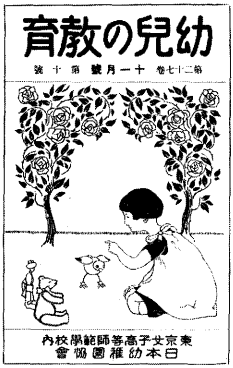
「兒童生活展覧會の印像記」から

第二七巻十号（一九二七年十一月発行）五十四～六十五頁掲載

著者は千束とあり、記事の内容から、東京女子高等師範学校附属幼稚園の教師であることがわかります。一九二七（昭和二）年十月九日～三十一日に東京・上野の東京博物館別館（当時）で「恵まれぬ都会の児童達のためにその日常生活を明るくし保健教育両方面から児童の資質向上に努めよう」[1]と文部省が玩具絵本改善研究会と協同して開催した「兒童生活展覧會」を訪れた印象について書かれています。幼稚園令公布の翌年、幼稚園教育が初めて単独で制度化された当時、都会に「恵まれぬ」子どもたちがいるという認識と、子どもの日常生活を「明るく」しようという危機感がうかがわれます。著者が勤める幼稚園は関東大震災で倒壊して三年、まだ仮園舎で保育をしていたころのことです。

この種の展覧会には附きもののクラブ（化粧品会社の名：浜口注）歯みがきの宣伝かたがたの蝋人形を用ひて歯の衛生を細かに示したものやら、同じくクラブの肝油はヴィタミンのAに富むとかキャベツはA・C含むとか云った栄養表もあった。（六〇頁）

行政的に幼・保が二元化する以前の時代であり、生活の質向上を科学的見地から啓発するために、文部省



『幼兒の教育』第27巻
第10号（1927年11月発行）
「兒童生活展覧會の印像記」
p54～p65

主催の展覧会で保健衛生習慣を啓発するような企画が「附きもの」だったようです（この種の博覧会が繰り返し開かれていたということでしょう）。また家庭へのいわゆる食育を促すために「おやつやお弁当のサンプル」が展示され、そこには「垂涎一糧の人々で人足が絶え」ず、「グリンピースの入れ方一つで目新しくもなったり、海苔一枚で私等が日常食べ馴れたものの面目が一新してゐる。聡明な母様は此等から得たヒントでこれに倍する御料理の数を殖される事だらう」と記されています。都市化された新興層の家庭では子育てや教育に時間を費やせる主婦層が形成されてきていた時代で、サンプルの前の「垂涎」には、そのような家庭生活様式への憧れも示唆されているのかもしれません。

幼稚園生活に関する記述を見てみましょう。番町幼稚園の出品物が好意的に紹介されています。「小供の家」が「果実屋」と「お菓子屋」に分かれて「お店ごっこに用いられる様」になっており、「幼児を連れて四つ谷公設市場に買ひ出しにゆく。果実の実物を観察し又多くを買ひ出して帰園後果実の写生をしその輪郭を切り抜き果実屋の店頭に並らべる」と説明されています。「いびつなリンゴ」も「了解に苦しむバナナの房」もあったが「真の小供の力の躍動に輝いて」いて、「力の限り形に表現してその出来上がったもの」による活動を高く評価しています。保育課程に「観察」の項目が加わった当時、一つの理想として紹介されている活動は、現代のプロジェクトメソッドカリキュラムに類似しています。大正時代から日本の教育

界に新しい風を呼んだ生活カリキュラムの幼稚園版ともいえ、倉橋による後の「誘導保育案」構想に結びついていくと考えられます。番町幼稚園のコーナーでは「幼児のメンタルテスト[2]と、体格との統計が出てゐたが惜しいかな時間に追はれてそのまま。」とあります。身体的精神的発達についての数量的測定が、当時の保育者の重大な関心事であったことがうかがえます。

一方で、「小手先きの器用」を誇示するような作品の展示に対して、著者の千束は次のように慨嘆しています。この嘆きはまだ過去のものとはなっていないのではないでしょうか。

……これが昭和二年の幼稚園の出品だらうか。

小手先きの器用が何ほどの価値があらう。その価値を無視するのではないけれどもより大切な事は、内に養われ培われてゆく実力ではなからうか。二十世紀は人を生まねばならぬ。小手先きが器用になったのみでこれこれのものが上手に出来ますと意気込むのは誤算である。私は器用な幼児を多く見る。けれどもこれを人として客観する時多くの失望を感じる。考へて欲しい。本当に考へて欲しい。人を造り出す保育であると云ふことを。（五十六頁）

「保育生活感想（抄）―子供と共に生きる―」から
第三三巻五号（一九三三年五月発行）
五十～五十一頁

これは一九三三（昭和八）年の記事で、「ある保姆養成所」の「生徒の保育実習感想摘記」であると説明されています。私は現在四年制大学で幼稚園実習関連の授業を担当しているので、七六年も前の学生がどのような記録を書いたのか非常に興味がありました。

自由遊びが大切だと聞いてゐたが、実習に出て始め

てそれを感じました。幼稚園へ出てゐると其の間、自分個人の心配事とか又しやくに触ってゐたというような事はすっかり忘れてしまふ。本当に不思議な程です。（A子）

昭和初期すでに「自由遊びは大切だ」という養成原理は徹底されていたと見えます。また「子供」と出会うと自分の心もちが変わることへの省察と、「子供の力」への驚きがあります。次のC子、D子の記録には、「子供の内部」の洞察と、「子供」と共にあることの喜びが表現されています。

『先生』と側に寄ってくる。子供のその短い言葉の裏にどれだけ多くの意味が含まれてゐる事だらう。それは個々によってすべて異った意味を示してゐる事と感じ得た。……ぢいっと無言で見上げるその顔一つで大体何を語り欲しているかをどんな要求を私に持ってゐるかを察し得る程、それ程私は子供の内部に親しんで来ることが出来たことをどう云ったらいいかわからない程うれしく思ふ。（C子）

口では命令的に叱ってゐるようでも本当に心の中でその子供を愛しその子の為を思ひその子供の心に共鳴してゐるならば、よくその心を汲みとってくれます。……友達もないのか淋しそうに皆の遊んでゐるのを眺めてゐる子供がありました。その姿があまりにもいぢらしく思ひ、同情させられてゐました。すると、自然にその心持が動作に現はれるのか、今日一番私を待ってゐてくれるのはこの子供です。（D子）

保育理解において現代の養成と大差ないようにも見えますが、精神分析的な幼児理解も、そして無論スイスの心理学者のジャン・ピアジェの発達心理学も、ま

た脳科学もまだ浸透していなかった時代であることを考えると、現代の「理解」観とはおのずと異なるパラダイムを彼女たちは生きていたに違いありません。愛と共鳴によって「心持」や「要求」を察しくみとり合う関係であったのでしょうか。

紙数の関係で引用はできませんが、「子供と『友達』でありたい」という表現も、C子やD子の記述に共通して見られます。現代の保育者養成では、「友達」感覚ではなく、「保育者の専門性」を培えと指導されるのが一般的だと思います。でも、これは養成理論が変わったというよりも、二十歳前後の青年期の「大人性」が変化したことを示唆しているのかもしれないと考えられます。昭和初期の学生は、モラトリアムが長期化している現代の私たちに比べ、かなり「大人」であって、「子ども」性から距離をもてていたのではないか……であれば、幼児と「友達」感覚になったところで、保育者の専門性を身に付けることと矛盾はしないという生活感覚があったといえるのではないかと思うのです。

最後に、この記事のタイトルが「保育生活感想」であることについて。これは当時編集主幹であった倉橋が付けたのではないかと想像しているのですが（確証はありません）、いずれにしても、今であれば「保育実習感想」というところでしょう。こんなことにこだわっている私に、「実習も『生活』でしょう」と倉橋が笑いかけてくるようです。

（お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科
人間発達科学専攻 幼児教育・保育人間学）

注

1 「今秋上野に開く兒童生活展覧會」『幼児の教育』日本幼稚園協会、第二七巻八月号（一九二七年九月発行）七十八～七十九頁掲載
（引用文の旧漢字は新漢字に直した。ひらがな表記および送りはまま。以下も同様）

2 三木知一郎の「一般素質検査」とある